

を胃内容中に発見したるものなるや、一見不明なれど、後方の文中に「恐くは嚙下されたるものならん」との記事あるより見れば後者の場合ならんかと思はる。果して然らば、斯る場合の存在は勿論可能なるべし。(石井重美)

●逆運動する動物

クラゲ・ウニ・ヒトデの数は元來は口を上に向け居りしものが下向となりしものならんも全類皆逆なる故逆と云へざる程なり。併し豊年魚・象クラゲの類・マツモムシの類は慥に逆に遊ぐと云ふを得べし。(豊年魚は數年間卵を壇に入れ乾燥し一年保存したるを翌年水に入れしに、數日にして幼蟲出現して皆親の如く背を下にて活潑に遊ぶを見たり。)一時的に逆に動くものは多くは外物に附着す。ヤモリ・昆蟲・腹足類にて見る。魚の内にて水の表面近く來るときは逆様に遊ぐものあり、ナマズ類にて *Synodontis membrumacensis*, *S. butanosolu* は其例なり。ナイル河に住み、腹面を上にとりよりして腹面暗褐色をなし、背部は淡灰色にて銀光を帶ぶ。此奇習は古代エヂプト人の注意を引さしものと見へ、時に背を下にして游泳せる様を書きたるものありと。(谷津直秀)

●蝦・クモヒトデ

瀬戸内海では蝦と鯛が主なる水産物であるが、蝦殊に赤蝦・虎蝦は、漁獲して之を剝蝦に製造し、支那輸出品とする。其漁獲物中に、若しクモヒトデが存在すると、其

附近にある蝦は皆柔く解けて了ふと云ふ事である。故に漁夫は之を最も恐れ。注意して除去するのである。此種のクモヒトデは、余の採集して漁夫に問ひ正した處では、普通の三崎等に見る種類よりも甚しく小形で、黒褐色をして居る。種名は松本理學士にでも御尋ねする事としたいが、兎に角右の話は事實らしい。かのナマコと藁の如きものではなからうと思はれる。併し自分は未だ實見した譯ではない。(中澤毅一)

●「イクシオクセヌス」の侵入徑路

Tetragoneus を其の腹腔内に持つて居る魚には、皆胸鰭の基部直後の腹壁に稍大きな孔があつて其處から、中に居る寄生蟲の體の後端が見える。此の事實は「イクシオクセヌス」は多分其の孔の部分から中に侵入したものであらうといふ豫察をば許すけれども、それ以上別に何等の斷定をも可能ならしむるものではない。その上件の開孔は必ず胸鰭の基部直後にあるといふ特異な事實、及一旦宿主から脱出した寄生蟲を再び健全な魚體に附着せしむると、寄生蟲は程なく鰓蓋の下に潜り込むといふ一二の實見の事實、又更に、一方、*Saccubina* の發育史に關する已知の事實などを思合せると、他に、いろいろの想像を起し得る餘地が無いとは云へない。

併し、自分は先頃大津で下のやうな事實を観察した。

八月十九日大津在膳所にて百七十九尾の *Tetragoneus* を得たり。其中、胸鰭の基部直後の腹壁に孔あるもの十一尾ありしが、其他の孔なき者

に於て、胸鰭基部直後の腹壁表面に軽度の出血ある者總て十五尾を數へたり。此の十五尾中、其の出血が體の右側に關するものは九尾、右側のみにて更に其局部的位置に就て細別すれば、胸鰭基部の後背側に在るもの七、同じく腹側に在るもの一、基部直後一體に稍激しく出血せるもの二、同じく左側に關するものは五尾（胸鰭基部の後背側に在るもの三、基部直後一體に稍激しく出血せるもの二）、左右兩側に關するものは一尾（左右共胸鰭基部直後一體に出血）なり。其他、臀鰭の前左側に沿うて極めて輕微の出血ある者只一尾あり。其他には體表面に出血ある者全く無し。

以上の觀察を約言すると、『恰度孔の存在すべき位置の附近に出血を示して居る者が可なり普通に有る。而もその出血は、殆ど皆其の部分に限られて居る』といふやうになる。

此の事實に依つて、最初の豫察（即ち現在の開口が寄生蟲侵入の徑路を語るものであらうとの豫察）は更に一層の眞實性を附與せられる事になる。勿論此の場合、上記の出血を *Ichthyoxenus* の穿孔的行動の結果と推定する合理的前提の許容ある事は曰ふ迄もない。（石井重美）

● ドクガゼ

今夏熊本縣天草郡牛深町に滞在在中、同地方の潜水夫が特に恐怖するドクガゼと名くるものある由を聞き、一日潜水夫を雇ひたる際所謂ドクガゼなるものを見しに、ラッパウニに外ならざりき。余が之を恐れず手摺みにて採り來るを見て驚き居れるが、彼等の一人は過日潜水の際之に觸れ、忽ち全身麻痺して呼吸つまり、聲も立得ずなりて非常に苦みたりと云ひ、又同業者の之が原因となりて

溺死の禍に陥るものありと語れり。掌を以て觸るゝは危険少けれど他の部分にて觸るゝは頗る恐るべしとききては、流石に余も敢て他の部分にて觸るゝの勇氣無かりき。果してラッパウニは有毒なりや。嘗て天草中學校教諭梅田廣治氏余に語りて、本渡町附近にてはバフンウニを怖るる風あり、生徒をして之を採集せしめしに圖らずも父兄の苦情を醸したりといふ。全然無害なるものをも傳説的に危険視して恐怖する事世間往々の例あり、ラッパウニもその類にあらざるか。識者の教を乞ふ。因に牛深にてはガンガゼをオンガゼ（オニガゼの意）を名け、潜水夫はその棘に觸れたるとき煙管を逆に啣へ、患部に煙を吹きかけて之を癒すといふ。

（大島 廣）

● 鯨の方言

頃日理學士田中茂穂氏よりの私信中に、次の様な記事があつた。

ネズミイルカ……ヌリボオ（東京市場方言）。

カマイルカ……テングイルカ、房州及東京市場方言）。

マイルカ……マイルカ、ツバメガタ（東京市場方言）。

ツチクジラ……ツチンボオ（房州方言）。

（青木文一郎）

● 話の種（十四）

東京自然博物館設立の意見

○近頃、亞米利加のスタージといふ博士が、御大典の御祝品獻納の爲、